

小泉八雲没後120周年特集



焼津を愛した 小泉八雲とは

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が没して 120 周年を迎えます。
 八雲の生涯をたどると共に、その著作と焼津との関わりを紹介します。
 問合先 焼津小泉八雲記念館 ☎620-0022

市ホームページ




小泉八雲の生涯

八雲の生い立ち

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、1850 年6月 27 日、ギリシャのレフカダ島で生まれました。父はアイルランド出身のイギリス人、母はギリシャ人で、ハーン自身はイギリスの国籍を保有していました。その後、父の実家のあるアイルランドに移りますが、母は異国の文化になじまず、幼いハーンを置いてギリシャへ帰ってしまいます。両親の離婚後、ハーンは大叔母に引き取られ、イギリスの学校に入学。 16 歳の時、遊戯中の事故で左眼を失明。さらに、17 歳の時に大叔母が破産し、そこからさすらいの人生が始まります。

日本に来るまで

1869 年にハーンは新天地を求め、渡米します。貧しい生活に苦しみながらも勉学に励み、やがて新聞記者として活躍。センセーショナルな記事が話題を呼び、記者として名を上げます。記者として働きながらも、『飛花落葉集』『中国怪談集』などの異国の怪談作品集や、クレオールと言葉や料理を取材した『ゴンボ・ゼーブ』『クレオール料理』などの自著を発表しました。1877 年に開催されたニューオーリンズ産業綿花百年記念万国博覧会で、日本文化に触れたことが、ハーンと日本を結ぶ重要な契機となりました。

日本での活躍

1890 年にハーンは記者として来日しますが、早々に出版社との契約を破棄します。職を失ったハーンは知人からの紹介で、島根県松江市に英語教師として赴任します。松江で小泉セツと結婚し、ハーンは初めて温かな家庭を得ます。その後、熊本で教師をし、神戸で新聞記者となります。1896 年、45 歳で日本に帰化して「小泉八雲」と改名しました。晩年は東京へ移り、大学で英文学の講師として教壇に立ちました。日本時代の八雲は、教師や記者として働く傍ら、熱心に日本の取材に当たり、計 13 冊の日本に関する著作を発表しました。1904 年9月 26 日、八雲は東京（西大久保）の地で 54 歳の生涯に幕を閉じます。

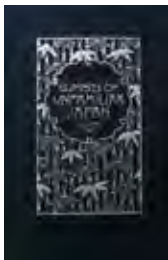
小泉八雲と焼津

焼津の海に魅せられて

八雲とその家族が初めて焼津を訪れたのは 1897 年8月4日のことです。水泳の得意な八雲は、夏休みを海で過ごすとう度良い海岸を探していました。八雲一行はまず舞阪（浜松市）の海を訪れましたが、遠浅の海は水泳に適さないと感じませんでした。その後、水泳に適した海を探した八雲は、焼津の深くて荒い海を大層気に入りしました。これ以降、海岸通りの魚屋・山口乙吉の家の2階を借り、亡くなるまでほとんどの夏を焼津で過ごしました。普段はひたすら机に向かって執筆活動に専念していた八雲ですが、焼津では水泳をするか、浴衣で散歩をし、焼津の人々と触れ合って、のんびりと楽しい時間を過ごしました。また、長男の一雄に英語や水泳を教えたり、お祭りを眺めて大喜びしたりと、家族を持つ父親として過ごしていました。八雲は焼津での体験をつづった「焼津にて」や「乙吉のだるま」、焼津を舞台にした作品「漂流」などの数々を作品として残しています。



八雲の作品



『知られざる日本の面影』(1894)

著作家として八雲は多くの作品を残しました。それらは翻訳、小説、ルポルタージュ、エッセイ、再話怪談と多岐に及びますが、日本時代の八雲は、ルポルタージュと再話怪談を多く手がけています。焼津滞在中も執筆のための取材は怠らず、その成果は、焼津を舞台とした「焼津にて」「海辺」「漂流」「乙吉のだるま」の他、焼津の地でインスピレーションを得て記した「夜光幻想」「餓鬼」などの作品として結実しました。

『怪談』出版 120 年

八雲没年に出版された『怪談』には、「耳なし芳一」や「雪女」など、日本でよく知られた八雲の怪談が収録されています。日本語が読めなかった八雲は、妻・セツが語る怪談話を聞いて物語を理解し、そこに自身の西洋的な文学アイデアを織り交ぜながら英語で再話し、作品を紡いでいきました。『怪談』は、八雲が生んだ怪談集の中の最高峰と称されています。今年はそんな『怪談』が出版されてから 120 年の節目を迎えました。



『怪談』(1904)

山口乙吉との思い出

八雲が焼津を訪れるようになったのは、焼津の海が気に入ったほか、夏の間滞していた家で魚屋を営む山口乙吉との出会いも大きな理由でした。純粹で、開けっ広げで、正直者、そんな焼津の気質を象徴するような乙吉を八雲は“神様のような人”と語っていました。乙吉は八雲を“先生さま”と呼び、八雲は乙吉を“乙吉さーま”と心から親しく呼んでいました。



山口乙吉

第33回企画展示会

不終の怪談 - 怪談に魅入られた文豪たち -

小泉八雲、泉鏡花、江戸川乱歩、中島敦の怪談文学に焦点を当てて紹介します。会期中 DMM GAMES「文豪とアルケミスト」とのタイアップ企画として実施します。

会期 10/5 (土)～令和 7 年 1/28 (火)

時間 9:00 ～ 17:00



詳しくはこちら



まちのホットな話題

Photo News

- フォトニュース -

市ホームページ「まちかどフォトニュース」でも人やまちのさまざまな話題を随時発信しています▶

焼津遺産に登録された貴重な無形文化財

正調焼津節伝承会による『焼津節と舞踊』（今年度「焼津遺産」に登録）が、8/25 (日)に開催された神武通り夜店市で披露されました。

焼津節は、1928 年に市民から歌詞を募り、詩人・北原白秋が選歌して誕生。昭和初期の焼津独特の文化や風土が表現されており、舞踊とともに市民に長く親しまれています。

夜店市に訪れた人は、先人が残した歌と踊りを楽しむとともに、当時の焼津へ思いをはせていました。



歌とダンスで観客を魅了

8/18 (日)、設立 30 周年を迎えた大井川ジュニア合唱団の定期演奏会『ミュージカル「スーパーモンキー悟空！」』が開催されました。

今年度の作品は、「西遊記」の物語を参考に、焼津を意識したオリジナルエピソードを加えたもの。団員 33 人をはじめ、保護者や地域の協力者と一緒に準備を重ねてきました。

当日は、伸びのある歌声や明るく楽しいダンスなどが披露され、会場は盛大な拍手に包まれていました。



ふるさとへの感謝を肖像画に込めて

9/4 (火)、やいづ親善大使で焼津市出身の洋画家、八木道夫さんが市役所を訪れ、市内の長寿者で年齢上位の4人を描いた肖像画が市に寄贈されました。

これは八木さんが洋画家活動の傍ら、自分を育ててくれたふるさとへの恩返しに気持ちを込め、毎年敬老の日に合わせて描き続けているもので、今年で 51 回目の寄贈。寄贈いただいた肖像画は、合計 179 枚となりました。八木さんは、「これからも体が動く限り描き続けたいと思う」と今後の目標を語りました。



八木道夫さん（右から2人目）



河川改修・道路整備の促進を緊急要望

台風第 10 号の接近に伴い、市内では大雨による被害が発生したことから、9/3 (火)、中野市長が県庁などを訪れ、河川改修や道路整備の促進を求める緊急要望書を提出しました。

要望書では、県が管理する石脇川、高草川、梅田川、小石川、木屋川、志太田中川の6河川について、早期の改修や水門への治用水用排水ポンプの新設などを要望したほか、道路冠水により長時間通行止めとなった国道 150 号（東益津地区）の道路のかさ上げなどの対策も求めました。



恐竜について楽しみながら学ぶ

ディスカバリーパーク焼津天文科学館では、11/24 (日)まで秋の特別展「冒険！恐竜ランド 25 の恐竜を探しだせ！」を開催しており、連日多くの家族連れて賑わっています。

これは、職員が企画・制作を行ったもので、体験展示に挑戦しながら 25 の恐竜を楽しく探すオリジナル展示です。

子どもたちは、いかだのオールを漕いで恐竜から逃げたり、空気砲で恐竜の的に風を当てたりし、体と頭を使って恐竜を探していき、楽しみながら恐竜の生態を学びました。



暮らしに役立つデジタルサービスを考える

9/7 (土)、スマートシティ YAIZU ワークショップが市役所本庁舎で開催され、高校生から 70 歳以上の約 50 人が参加し意見交換を行いました。

今回は、デジタルマップ（地図）を題材に、「防災」「健康」など6テーマに分かれ、地域・暮らしに役立つマップ活用のアイデアについて話し合いました。

次回は、11 月に住みやすいまちにつなげるデジタルサービスのアイデアを考えるワークショップを開催します。

